

平成30年10月1日(月)

神無月朔日

本日から10月です。校長便りも100号が済み、新たに次の200号を目指し、日々精進してまいります。

神無月の語源は、神を祭る月であることから「神の月」とする説が有力とされ、「無」は「水無月」と同じく「の」を意味する格助詞「な」とであるとされています。

しかし、中世の俗説には、旧暦10月に全国の神々が出雲大社に集まり、諸国に神がいなくなることから「神無月」になったとする説があります。ちなみに、出雲では、「神有月」と呼ばれています。

出雲大社と伊勢神宮の関係も面白い。

伊勢神宮は、天界と地上界の主で、天界の最上級神である「天照大御神(あまてらすおおみかみ)」を、主として、お祀りしている神社です。

日本に古来から伝わるとされる「三種の神器」の内の一つであり、天照大御神の依り代である「八咫の鏡(やたのかがみ)」が祀られています。

また、「天照大御神」は、天皇家の祖先の神と言われています。このため、神社を代表する神社と言われています。

出雲大社は、毎年・旧暦の10月(11月)には全国から「八百万の神(やおよろずのかみ)」が集まって、会議を行い、世の中のあらゆる事を決める重要な神社です。

主の神様として祀られているのは国つ神(地上の神)のリーダーである「大国主大神」です。

つまり、伊勢神宮は天界のリーダーを、出雲大社は地上界のリーダーを主の神様として祀っているのです。

日本最古の歴史書である「古事記(こじき)」によれば以下のような記述があります。

「天照大御神」は「伊邪那岐命(いざなぎのみこと)」から生まれた。また、「大国主大神」の直系の祖先である「須佐之男(すさのおのみこと)」も「伊邪那岐命」から生まれた。

つまり、伊勢神宮も出雲大社も祀られている神の祖先は、どちらも同じ「伊邪那岐命」ということです。

また、古事記では「天照大御神」の子孫が、「大国主大神」を、祀る「出雲国造(いずものくにのみやつこ/いずもこくそう)」になったと記されています。

伊勢神宮と出雲大社の間には、このように遠い過去から、不思議な結びつき

があったのです。

この二つの神様の関係は、大和王権が関係します。大和王権の本拠地である「大和」は、この「出雲」と「伊勢」とを一本のラインで、とらえる事ができるそうです。

「大和」から見た、伊勢は「東方」の位置にあたります。東は日の登る方向であり、当時では「生」を象徴する方位だと言われていました。

一方、出雲は大和から見れば、西方の位置にあたります。西は日の没する方向です。当時では、西は「死者の国のある方位」と言われており、出雲は、死者の国への入り口であると考えられていました。

以上のことから、伊勢神宮と出雲大社は以下のように、常に対局軸にある関係であるという説明ができます。

「天（伊勢）と地（出雲）」

「生（伊勢）と死（出雲）」

「日昇（伊勢）と日没（出雲）」

「清いもの（伊勢）とけがれ（出雲）」

しかし、おかしいことに両社でお祀りしている神様は、祖先が同じ神様なのです。

しかも当時では、不思議なことに以下のようにも考えられていました。

「生と死は、一つであり、切っても切り離せない関係にある」

つまり、当時の大和王権にとっては、国を支配して行く上で、伊勢神宮と出雲大社2つの社が、重要な役割をはたしていたと考えることができるのです。

つまり、この2大神社は、実は、2つで1つとしても考えられるのです。

これらのことから、「伊勢神宮」と「出雲大社」の秘められた関係とは、以下のように、まとめることもできます。

「伊勢神宮と出雲大社は、もともとは一つの神社であった」

しかし、

「伊勢神宮と出雲大社とは、あくまでも対極の位置関係にある」

とも言えるわけです。

ここで思い出すのは、村上春樹の「ノルウェーの森」の主題です。

「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」

「生はこちら側にあり、死は向こう側にある。僕はこちら側にいて、向こう側にはいない。」

しかしキズキの死んだ夜を境にして、僕にはもうそんな風に単純に死を（そして生を）捉えることはできなくなってしまった。死は生の対極存在なんかではない。死は僕という存在の中に本来的にすでに含まれているのだし、そ

の事実はどれだけ努力しても忘れ去ることができるものではないのだ。あの十七歳の五月の夜にキズキを捉えた死は、そのとき同時に僕を捉えてもいたのだから。〉

この関連について、後々調べてみたいと心から思います。

大和王権において、伊勢神宮と出雲大社が両方必要とされたのは、生と死の考え方と大きく関連していると考えてよさそうです。